

がぶく レポート

今年六月に農協法が改正され、同時に農林中央金庫法と農林中金・信連統合法の改正（農協金融再編・強化法に改称）が行われた。これにより「JAバンク」構想が打ち出されるとともに、農協改革がいつそう推し進められることになった。今回の法改正に先立って二〇〇〇年四月より「農協系統の事業・組織に関する検討会」が十七回開かれ、同年一月には「農協改革の方向」と題する報告書が公表された。

著者はこの報告書を一読して大きな違和感を持ったという。本書

は、この「農協改革の方向」を批判的に検討し、違和感を持った部分を詳しく説明するとともに、今後の研究課題を提示したものである。著者は、最近の農協論壇は低調で元気がなく農協問題の核心に迫るものは極めて少ないと指摘しており、本書は「農協改革の方向」に異論を唱えることにより低調な農協論壇を刺激したいという意図がある。

第一部では、「農協改革の方向」のなかで大きな比重を占めている信用事業について検討している。取り上げられたテーマは、

「農協改革の逆流と大道

「集権と大競争」から「分権と棲み分け」へ

早期是正措置における自主ルールの策定、検査体制の強化、貯金保険機構の役割、ペイオフ解禁等であり、それぞれ報告書の内容を検討し異論を唱え、最終的にはJAバンク・システム構想を批判している。これらのテーマは近年農協金融を議論する時に枕言葉のようになっている事項であるが、仔細に検討するとまだ掘り下げなければならぬ問題点が多くあることを改めて認識させられる。

第一部では、信用事業以外の事業と組織体制について検討している。特に注目され

三輪昌男著（農山漁村文化協会）

るのは、「営農指導が農協の第一の事業」であるとしていることに対して異論を唱えていることである。「地域農業振興戦略」を樹立するということは掛け声としてはいいが、これは政府に言われてやるようなものではないとしている。現在、農協の営農指導員は一七千人近くおり、現在も組合員には営農指導に対するニーズが強くあるが、営農指導単独では赤字であり、販売事業・信用・共済事業と結びついてこそ農協経営に立つての意義がある。営農指導事業の赤字をどう評価するのか、一万人近くいる農業改良

普及員との関係をどう考えるのか、再検討が必要な時期に来ていると思う。それは生活活動にも言えることであり、著者は、赤字になっているのは甘えがあるからであり、赤字を解消できない女性部は廃止したほうがよいと主張している。また、執行体制については、経営管理委員会を機能させるための提案を行っている。

最後に、終章において、政府と農協の関係のあり方に触れ、農協改革のためには、改革の担い手が元氣よく働く条件を作り出すことが必要だとし、ネットワーク型組織を提案している。この主張は、

副題の「集権と大競争」から「分権と棲み分け」へ」にまとめることができる。

以上、本書の概要を紹介したが、我々農協系統の研究所で働く人間

は、最近の農協研究には問題の核心をつくようなものが少なくなつたという著者の指摘を重く受け止めなければならないであろう。本書の主張がすべて正しいということはないであろうし、販売事業、組合員資格（准組合員問題）、統一協同組合法問題など、本書では十分検討されなかつた課題も多々ある。しかし、本書で提示された研究課題を受け止め、今後我々が掘り下げた研究を行っていかねばならないことを痛感した。（二〇〇一年八月、二二八頁、一、九五〇円）（清水徹朗）